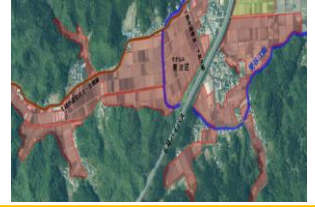


いわき市菅波地区

1 想定するモデルとしての姿、モデルとする事項

- 大豆の収量・品質の安定化を図り、規模拡大を実現する。
- 地域の合意形成で農地集約し、ブロックローテーションによる大豆の田畑輪作体系を実現する。
- 大豆導入による収益性を明らかにし、地域に波及させるモデルケースとする。



2 生産概要（中心的な担い手の概要）

- 【作付面積】（R3）水稻：17.0ha（内飼料用米5ha）、小麦：1.2ha、大豆：無し
（R6）水稻：20.0ha（内飼料用米3ha）、大豆：0.7ha
- 現在は、ほ場の区画が小さく、広域に点在しているため、2年3作のブロックローテーション（水稻→小麦→大豆）を目指し、R3より麦、R4より大豆の生産を開始したが、水稻移植による大豆の作業遅れ（特に播種作業）が常態化していた。
- R8実施予定の基盤整備事業後に、大豆・麦類の作付割合を拡大する予定。



3 取組のポイント（モデルとして構築する取組）

<需要に応じた生産を徹底>

- 現在はJA出荷であるが、将来、収量が確保できれば地元の実需者と連携した販路を検討する。

<大豆の適期播種実現と初期生育確保に向けた取組支援>

- 大豆適期播種に向けて、水稻のドローン直播技術の導入により
水稻移植時間の削減分を大豆播種へ労力投下
⇒作業スケジュールの改善により大豆の6月中～下旬の播種が可能となった。
- 排水性の高いほ場の選択や額縁明渠等による初期生育を確保。



4 取組成果

<大豆の単収向上>

- 令和5年産では、播種時期の遅れにより、生育が確保出来ず、ほとんど収穫が無かったが、令和6年産では、適期の播種作業や排水対策により初期生育を確保したことで、幾らかの収穫が得られた。しかし、いわき地域の基準単収には達していないため、収量・品質向上に向けて作業改善に努める。

<作業スケジュールの改善>

- 水稻作によるドローン直播等の導入により、生産者の作業スケジュールの改善され、6月中下旬の大豆播種が可能となった。

5 課題（7年度のポイント）

- R6年産大豆は、作業スケジュールの改善により播種作業等が適期に行われたが、作付したほ場が、そば・小麦等の畑作物を連作していたため、除草剤散布をしたにもかかわらず、畑雑草が繁茂し、大豆生育量が確保できなかった。
- カメムシ類の吸汁による、汚れ粒・被害粒の混入により、検査等級が規格外となった。
- R7年産の大豆作では、前作が水稻ほ場で作付や中耕培土を実施し畑雑草の発生抑制を図る。また、ドローン等による病害虫防除によりカメムシ吸汁粒の発生を抑え品質の向上を図る。
なお、色彩選別機を導入している経営体とマッチングを進め、汚粒の混入を防ぐ。